

ドクターインタビュー

小島医院 院長 小島 崇嗣 先生

兵庫県三木市、神戸電鉄三木駅から徒歩5分。平成6年に開院された小島医院で、小児・小児アレルギー科を専門として治療が行われている、院長の小島先生にお話を伺いました。

——先生が小児科医を目指されたきっかけなどお聞かせください。

医学部を受験しようときめたのは、高校3年生の冬、本屋さんで赤本(大学受験の過去問題集)をみて決めました。医学部学生時代は小児科の授業は好きではありませんでした。赤ちゃんの講義では、あまりの小ささに、頭で想像できなくて困りました。しかし、いざ小児科に入局して小さな子ども達と毎日接するようになりますと、子どもが愛おしくて小児科という学問が大好きになりました。私は入局した頃は、ちょうど新生児医療が始まったばかりのころで毎日の生活、勉強がとても充実していたことを懐かしく思い出します。

——小児アレルギー外来の診療について教えてください。

私は小児科医ですから子どものアレルギー疾患:喘息、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、花粉症、などを診ています。食物アレルギーでは、原因抗原の診断、除去指導、解除のための経口負荷試験などを行っています。経口負荷試験は毎日8~10名の試験を行い、子どもの食べられる量と種類を増やすように努力しています。皮膚については、生後2か月に初めて来院した時点から積極的にスキンケアを行っています。また、肌の弱い赤ちゃんは食物アレルギーを高率に発症しますので、2か月で母乳栄養児の場合には、一日一回ミルクを飲んでもらっています。こうすると、ミルクアレルギーを起こしませんので、その後の食事指導が助かっています。アレルギー体質を持った赤ちゃんは中耳炎をよく起こします。当院では、気管支ファイバーを用いて、耳の観察をしています。それをテレビ画面に映しますのでお母さんにもよくわかります。鼓膜の観察を毎回していますと、不思議なことがあるのに気づきました。実は、中耳炎の起こり方は毎回同じだということです。例えば、鼻水が出始めて4~5日経つと中耳炎を起こす子どもは、毎回そうなります。

気管支喘息の治療では、モストグラフを用いた負荷肺機能検査と呼気NO検査を併用して治療方針を決めています。モストグラフは3歳頃から検査が出来ますので小さな子どもの喘息を管理するのに役立っています。呼気NO検査は5~6歳から検査が可能となります。また、喘息を持っている子どもの多くはアレルギー性鼻炎や花粉症を持っていますので、鼻炎に対する治療も大切です。このような子どもは、高率に副鼻腔炎をおこしますが、当院では、腹部エコーのプローブを使って上顎洞の炎症の有無を観察しています。そうすることで初期の副鼻腔炎を発見出来ますので、速やかに治癒いたします。

——最近の小児アレルギーについてお聞かせください。

数年前から、スギとダニの舌下免疫療法を行っています。大きな副反応もなくできていますし、その効果も非常に大きいものがあります。スギは免疫療法を開始した翌年から症状がほとんど出なくなりますし、ダニの舌下免疫療法では、開始後3か月頃から効果が出てきます。埃っぽい所に行っても症状が出なくなると喜んでもらっています。また、最近気になることとして、多種類の果物や食品に反応する重症の果物アレルギーの子どもの数が増えていることです。その反応も口腔アレルギー症状だけでなく、時にはショック症状を引き起こす子どもが増えています。このような子どもは、多くの花粉に感作されています。治療は花粉症に対する減感作療法が有効なのですが、現在日本では、スギの免疫療法以外ありません。今後、イネ科やハンノキなどの免疫療法の需要が増加すると思います。

——赤ちゃんのアレルギー感作や、離乳食の時期などについて教えてください。

今は予防接種時期の問題で、生後2か月で来院されることが増えました。この時期はアトピー性皮膚炎の始まる時期でもありますので、積極的なスキンケアを始めるのに一番適した時期です。生後早期から積極的にスキンケアすることで食物アレルギーの進展を抑えることが出来ますし、ダニの感作を減らすことも可能です。先にも述べましたが、当院では、肌の弱い母乳栄養児に対しては、一日一回ミルクを飲ませて欲しいとお願いしています。この時期からミルクを飲みますとミルクアレルギーを起こしません。生後3か月になるとミルクに感作されている赤ちゃんがすでにありますが、生後2か月の時期の来院はいろんな意味で有り難いと思います。肌の弱い赤ちゃんに対しては、積極的なスキンケアに加えて、定期的に卵やミルクなどの皮膚プリックテストを行っています。プリックテストで反応が見られるようであれば血液検査でCAP値の測定をしています。離乳食はこれらの検査結果をふまえて個々に指導していますが、離乳食を始める時期は赤ちゃんがお母さんやお父さんの食べものに興味を示すようになる頃だと思



小島 崇嗣(こじま たかつぐ)先生のプロフィール

【ご経歴】

関西医科大学 小児科講師

関西医科大学 小児科非常勤講師

日本未熟児新生児学会評議員 / 日本新生児学会評議員

日本アレルギー学会専門医 / 日本アレルギー学会指導医

【所属】

日本小児科学会専門医、日本小児アレルギー学会専門医

【受賞歴】

関西医科大学研究奨励金授与、森永奉仕会研究奨励金五年連続授与、日本小児アレルギー学会優秀論文賞授与

ます。生後4~5か月頃です。当院では、栄養士が作成した離乳食のメニューをお渡しして、離乳食の参考にしてもらっています。特に母乳栄養児では、鉄、ビタミンD、亜鉛など不足しやすい状態にありますので、体重増加のチェックが欠かせません。また、最近では、ビタミンDと骨との関係だけでなく、肌とも関係があると指摘されていますので、日光浴の必要性についても説明しています。窓ガラスは紫外線を通しませんから日光浴にはなりませんのでご注意ください。

また、最近、卵の早期摂取が推奨されていますが、肌が荒れている赤ちゃんの場合には注意が必要です。当院で調べた結果では生後6か月の時点で、湿疹のある赤ちゃんの約85%が血液検査で卵に反応していました。これらの赤ちゃんでも、注意しながら少量ずつ食べていけることもあります。反対に、急速に卵アレルギーの程度がひどくなってごく少量の卵を食べても発疹、蕁麻疹、腹痛、嘔吐がでる赤ちゃんもありますので、湿疹のある赤ちゃんの場合にはアレルギー専門の小児科医と相談しながら食べていきましょう。

——保護者の方にメッセージをお願いします。

アレルギーがあっても元気にたくましく育ってくれることを願っています。そのために私たちが出来る事は何だろうといつも思います。適切にアレルギーの病気をいっしょに治していくことは当然のことです。何でも言える関係がすごく大切だと考えています。アレルギーを持っている子どもは優しい子どもが多いように思っています。自分のことを考えるから人にも優しくなれるのでしょうか。私は、優しく強い子どもを育てたいと願っています。そこで私が勧めている言葉が「ありがとう」という言葉です。何かしてくれたことに対してではありません。その子どもの存在自体に対しての感謝です。自分たち家族の所に来てくれてありがとう、と言う感謝の心です。これは、小林正観さんが沢山の著書のなかに書いておられます。「ありがとう」と言い続けると、子どもはすごく安心します。そしてこの世での心の居場所ができます。そうすると、優しく強い子どもになります。思いやりがあって、いじめにあってもびくともしない子どもに育ちます。一日に何回でもありがとうと言ってあげましょう。

それともう一つ私が大切だと考えていることがあります。それは、身体をよく動かすことです。身体を動かすと考え方が変わるように思っています。子どもにはよく遊ぶように毎回言うようにしています。遊びこそ全身運動です。子どもの時代にはスポーツよりも遊ぶ方が全身運動に適しています。よく遊んでください。遊びの中で友達とのつきあい方やいろんな考えが育ちます。当院では、約三十畳の外待合室を利用して週一回の極真空手教室を続けています。ほとんどが当院の子ども達です。楽しく思いっきり練習してほしいと願っています。

——先生の趣味やストレス解消法など。

武術の練習でしょうか。古伝武術が使える身体作りに励んでいます。が中々思うようにはなりません。難しいですね。それと、お滝でしょうか。毎月一度、京都に行ってお滝に入ります。心が清められますので、できれば続けたいと思っています。